
それでもジジイは見捨てねえっ！！

Aモンド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それでもジジイは見捨てねえっ！！

【Nコード】

N6403Y

【作者名】

Aモンド

【あらすじ】

ジジコン少女が不遇な運命のジジイを救うため、神のジジイから割と便利な能力を例によって3つほど頂き、『NARUTO』の世界へと転生する話。少女によるジジイのための救済劇。ふと、頭に浮かんできた設定をやってしまった…。常に半歩引いた感覚でお読みください。

ジジコン少女が世界を渡るようです（前書き）

頭がどうかしていたようだ…。

この小説は真面目に読むものではないかもしれません。

自分がアホになったような気持ちでお読みください。

ジジコン少女が世界を渡るようです

お菓子の空き箱が散乱する床、週刊誌が乱雑に積み上げられ塔の様にそびえ立つ。

窓はカーテンで閉め切っていて、一切の日の当たらないそこは、淀んだ空気が沈殿しているように見える。

「嫌アアアアアっ！！死ぬなア！三代目え！！」

狭い室内に響いた声は少女のものだ。

ベッドの横のライトの光は暖かく声の持ち主を照らしている。

光源に照らされた顔は幼く、その頬には一筋の涙が光っている。

悲痛に歪んだ表情は、それでもまだ愛らしいと言える。

手元には何らか書籍が開かれ、そのページに頬から伝わった滴が落ちる。

「何故だ…岸本。いや、著者は何故こうもジジイをコロスのだっ！」

ズズツ、と鼻を嚼る音だけが聞こえる。

やがて、本を枕元にと置いた少女は布団に包まった。

時刻は朝の9時。

少女は俗に言うひきこもりであった。

しばらくすると、穏やかな寝息が聞こえてくる。

暗闇となった室内には、その音だけが響いていた。

少女の意識が覚醒する。

しばらく目を瞬いていたが、自らの状況が呑み込めないようで、何度も目を擦っている。

荘厳な雰囲気醸し出す回廊。

白を基調に、様々な意匠の施された柱が左右に等間隔で立っている。血で染めたような紅色の絨毯はどこまでも続き、果てなどないように錯覚させる。

やがて、少女は前へと進みだした。

どのくらい歩いたのか、どれ程進もうと一向に様相を変えることのない回廊に、少女は時すら忘れてしまいそうになる。

不意に、紅路の終わりが現れる。

純白の門。だが、明らかに人間に開けられる物ではない。

もはや、壁。

泰然とそびえ立つそれは、永久に開くことなどないかのようだ。

少女は前へと歩みだした。

門に手を触れると、人がようやく通れるような分だけ門が開いた。

門を通り抜けた先に居たのは一人の老人。

コツコツと杖で床を小突いて、こちらに手招きしている。

快活そうに笑う姿は、いかにも好々爺然としていて、こちらに危害を加えることなどないように思える。

少女は驚く程のスピードで前へと躍り出ると、老人へと抱きついた。

「これは…なんて素晴らしいんだッ！『私の想像した素敵なおじい様』そのまんまじゃないか！こんなところでお会いできるなんて…是非、おじい様と呼ばせてくださいッ！」

「ほっほ、もちろんじゃよ。こんなジジイに懐く幼子など久しく見なかったが、懐かしいのう」

少女は抱きつきながら頬ずりしだす。

それでも、老人は不快そうな表情は一切見せず、ただ微笑を浮かべている。

やっと満足したのか、少女は老人から身を離れた。

「それで、おじい様。ここは何処なのでしょう？外国に観光にきた憶えなどないのですが」

「それはそうじゃろう。ここにお主を呼んだのは他でもない、この儂じゃからな」

老人はただ愉快そうに笑い続ける。

その表情に一瞬陰りが覗いたことを、少女は見逃さなかった。

「おじい様、何か困ったことでもあるのでしょうか…。ひどく…悲しそつに見えます」

「うむ、それなんじゃがな。お主には別の世界に行ってもらいたいのじゃ」

しばし呆気にとられた少女であったが、直ぐに再起動し、切り返した。

「どういふことですか。いまいち状況が読み込めないのですが…」

「まず、僕は人ではない。地上からは神と呼ばれておる者じゃ。ここまででは分かったかの？」

初対面の人物に言われて信じられることではなかったが、少女はすぐさま頷いた。

目の前の老人は地から浮いていた。目を凝らして見ると、背には翼のようなものがつつすらと存在する。そして、この異様な場所。

神々の居住地と言われても納得できるここに存在する老人の言を、疑うという気は少女には無かった。

「それでのう…。お主も散々見てきたじゃろう、ジジイキャラの行

く末を…。最近のう、儂の肩身が狭いんじゃよ。神の造形というのは出現したときの地上の思想によって決まるのじゃがな…。地上でアニメというものが流行してからというもの、やれ美形、それ美人果ては幼女なんていう容姿の奴等が出始めたのじゃ。儂は古株なんぞでな、大昔に出現した儂らはこんな容姿なんじゃ…。それでな…。最近の奴等はまー儂らを敬わん！美形の総数が増えるとな、日に日に態度がデカくなっていったんじゃ！なーにが美形か、ジジイキラの深さには敵わんのじゃ」

「しかしの…」と肩を落とした老人は続けた。

「最初は儂らも対抗したのじゃ、じゃが地上の創作物：あれがいかんかった。どの物語も大抵はジジイが死ぬ。いくらいいジジイであろうと、消えてしまえば人は忘れる。その結果が今の神の情勢じゃ。次第に儂の仲間も時代に身を任せるようになってしまった。じゃがの、儂はもう一度ジジイの尊厳を取り戻したい。そのために死にゆくジジイの運命を変え、仲間達の心に再び火を灯す必要がある。そこで見かけたのがお主じゃ」

「私、ですか…?」

「そうじゃ、お主がジジイの悲運さを嘆いていたのは知っておる。儂らもここから地上を見下ろす度に感心しておった。そんなお主がジジイを助ける姿を仲間に見せたい。どうか頼まれてくれんかの」

「了解しました！おじい様の頼みなら喜んでお受けいたしますよう。私の手で助けられるのなら是非ありません！」

老人は目頭を押さえて、蹲った。
心配したような声色で少女が問いかける。

「すまんの。久しく優しさというものを感じていなかったせいか、新鮮での。もう大丈夫じゃ。それで先の話の続きなんじゃが…ジジイを助ける使命を授かったお主には僕から加護を与える。物事を变えるには力が必要になるからの。それで、力を与えるにあたってお主の救いたいと思うジジイを選ぶのじゃ。世界によつて力も異なるからの」

逡巡の後、少女はやおら口を開いた。

「それなら…三代目のおじい様を救いたいです」

「ほう、あ奴か。僕も不憫に思つておつたところじゃ。ジジイ救済劇の相手には申し分ないわい。それでは行先は『NARUTO』の世界じゃな。ふむ、何を与えようかの。救う過程も大切にせんと効果は薄いからの、ふむ…」

指で眉間を摘みながら老人は唸った。

やがて、老人は思いついたように顔を上げた。

懐から古ぼけた手記を取り出すと、毛筆で何事かを書き綴っていく。

「まあ、こんなところかの。お主には習得した忍術を十全に扱える才能、そして成長の限界をはずしてやるう。例えるとしたら、お主は影分身を習得した瞬間に、その術を最高の効率で扱うことができる。成長の限界は、言う必要はないかの…まあ、身体能力の向上はもちろん、他にも内在できるチャクラの総量が青天井に増やせるとかじゃな。儂はこれで十分だとは思うんじやが、他に必要なものがあるかの？」

「本当ならおじい様に意見したくはないのですけど、幻術を無効化できるようにして下さい。月詠とか絶対喰らいたくないです」

「それでよいかの。では、頼むぞ。このジジイの行く末はお主に託した」

「お任せください、おじい様。必ずや三代目を救って見せますッ！」

「この道を進むといい。こんなジジイの頼みを聞いてくれた事、感謝するぞ」

老人は相好を崩した。

次第に老人の姿がぼやけていく。

気が付くと、周りは元の回廊に戻っていた。

少女は瞳に決意の光を灯すと、回廊を進んでいった。

「ジジイは絶対に救って見せる！！」

ジジコン少女が世界を渡るようです(後書き)

ハイ、お疲れ様でした。

ジジコン少女は生け花をするよつです(前書き)

ハイ、頭の中を空にしてからお読みください。

ジジコン少女は生け花をするようです

「おじい様あー！どこにいらっしやるのですかー！！」

「いけませんぞユレン様。火影様は里の政務中、迷惑をかけてはなりません。ささっ、早くお勉強にもどりましょう」

「うるせーぞ、クソ虫。私のおじい様との逢瀬を邪魔するか」

「またそのような、お下品ですぞ！もう一度作法の勉強からやり直した方がよろしいようですな」

「チツ、分かったよ。戻ればいーんだろ、戻れば」

目の前で悪態付いた少女に、エビスは小さく溜息をついた。

（どこで教育を間違えたのでしょうか…。いや、割と最初からこのような性格だった気が。火影様、この方の教育係などに任命されて…恨みますぞっ！）

ラベンダー色の綺麗な長髪は腰まで流され、パチリとした緋色の瞳は清流の様に澄んでいる。

今はまだ幼い顔立ちだが、将来は美人になるだろう少女。

猿飛ユレンは端正な顔を憎々しげに歪めてぼやいた。

「今日はなんだっけ、あーそうだ生け花だっけか…。クソが、なんで忍びになんのに花なんかやんなきゃなんねーんだよ」

「ユレン様には忍者の前に、淑女としての自覚が足りませぬ！もつと真剣に取り組んで下さいませ」

「わーったよ、ならさっさと戻るぞ、エビス」

先に歩いて行ってしまったユレンの背中を見送り、エビスはふと窓の外に視線を移す。

あいにく今日は曇天であり、雲の晴れ間も見えない。

今の自分の心境と重なって見えてしまい、エビスは溜息を付いた。

「おい、エビスッ！置いていくぞッ！」

「いま参ります！」

木張りの長い廊下をしばらく歩くと目的の場所へと着く。

一面に畳の敷かれた個室。

エビスは部屋の隅へと移動すると、黒染めの木箱から生け花に必要な物品を取り出す。

花を生ける為の器やら、鋏など。

部屋の中央へと並べ、やってきた女中から数種類の花を受け取ると、ユレンへと促した。

「ささっ、こちらへお座りください。今回はお好きなように生けてもらって構いませんぞ」

「はいよ、こんなもんかねえ…」

エビスの手から花を数本ひつたくると、特に悩んだ様子もなく器に突き刺した。

そう、ただ突き刺しただけである。

数種類の花がなんの調和もとれずに飾られているそれは、見るものに混沌とした様相を呈すだろう。

「はあ…ユレン様」

「なんだエビス。私の作品に感動でもしたか？うん、正直私も自分の才能が怖い」

うんうんと腕を組んで目の前のそれを自画自賛する少女に、エビスは潜在的な頭痛を覚えた。

「ユレン様、あなた様は今年の春からアカデミーに通われることになります。当然、くノークラスで学ばれるのですが…男子と違って女子は教養の方もひじょーに重視されるのです…」

「なんだ、なら問題ねーだろ。既に主席の座は貰ったようなもんだな。喜べエビス、家庭教師として鼻が高いだろう」

「ユレン様…本気で仰っているのですか？」

何の事だか分かっているいなさそうな表情をするユレン。
エビスはもう一度外の方へ視線を向けた。

一向に晴れる気配のない空。
ついには小雨がぱらぱらと降りだした。

「くそ、降ってきちまった。おじい様と街に行く約束が……」

「ですから、火影様を連れて行くなとあれほど申した筈ですよ！」

「そつだ、街に出れない分で遊ぶ約束を取り付ければあるいは……。
よし！そつと決まれば……おじい様ああ！！」

「何処に行かれるのですか！？まだ忍術の勉強が残っているのですぞ！」

エビスの説得虚しく、ユレンは何処かへ駆けて行ってしまった。

「私はエリートなのですぞ……。それが、こんな……」

静まり返った室内には呟きだけが虚しく響いた。

汗で顔に張り付いた髪が鬱陶しい。
雨で湿度が上がったのか、ただ動くだけでも不快感が増していく。

あれから三代目を探しにエビスの授業からとんずらしたユレンは、
火影亭を駆けずり回った。

全ての部屋をそれこそ風潰しに探して回ったのだが、結局探し人を見つけることはできなかった。

かといって逃げ出してきた手前、今更エビスの所に戻るのも躊躇われた。

手持無沙汰になったユレンは、ほとんど無意識化である場所へ向かった。

屋外へと出ると、冷たい感触が肌を刺激する。

傘を取りに戻ろうかと少し迷ったが、エビスへの遭遇の可能性を考えて濡れて行くことにした。

大通りを右へと歩き、なだらかな坂を下る。

コンクリートで舗装されたそれは雨でぬかるむ事もなく、安定した足取りを提供してくれる。

しばらく進むと狭い路へと抜けた。

迷路のように入り組んだ路を右へ左へと慣れた様子で進んでいく。

やがて、民家の数が少なくなってくると、離れた場所に目的の建物を見つけた。

道場。ユレンが三代目に修行を見てもらうときはいつもここに来る。以前は猿飛の者が修行場として通っていたこともあったらしいが、里の中心部に同じものが作られると通う者はいなくなったそうだ。そのため、今は秘密の修行場とでもいえる場所になっている。

門を開けると木の軋む音がした。

道場の中は一人で使うには勿体無い程広々としている。

周りを見渡す。

前回来てからそれほど間隔は空いていなかったため、うっすらと積もった埃以外は特に変化は見られない。

室内の中央へと移動する。

精神を落ち着けるために深呼吸を一つ。

息を吸い込むとどこかカビ臭いような感じがした。

感想を意識の外へと追いやり、手を前方に突出して掌にチャクラを集中する。

チャクラ。術者の精神エネルギーと肉体エネルギーの総称。

これらを練り合わせ、印を組むことで初めて忍術が発動する。

一般人がアカデミーの教科書の記述を読んだとしても、その感覚を掴むことはできないだろう。

そもそも忍者となり得る人間は人体の組織からして一般人とは隔絶している。

同じ形をした別の生物といった表現が正しいだろうか。

だから、忍者である私にはその感覚が 分かる。

集めたチャクラを回転させる。

一定の方向ではなく、ランダムに、繊細に流れを乱す。

そうしてチャクラを乱しつつも、放出は一定量に抑える。

難しい。

気を抜くと直ぐに霧散してしまいそうなそれを見やり、歯噛みした。

物語の主人公であるナルトの十八番おはじ、螺旋丸。

現在、ユレンが習得しようとしている術である。

忍術の勉強が始まり実際に術を覚え始めると、ユレンは里の中で天才と呼ばれるようになった。

分身の術を教えたなら、次の瞬間には100人の分身が出現した。

戯れで教えた火遁の術によって家が大炎上した。

これらは全てこの世界に来るにあたって与えられた才能の恩恵である。

本来忍びが長い年月の中で感覚的に掴んでいく術のメカニズムを習得時に獲得できる。

これは捉え方によつてはあの”写輪眼”よりも有用であると言える。

”写輪眼”保持者は術を視認するだけでそれを行使する事が出来る。

つまり、術の習得に時間を費やす必要がないのだ。

ただ、見ればいいのだから。

しかし、術をコピーして使うのでは発動までは漕ぎ着けることができるがその先の応用性は全くと言って良い程ない。

それはどこまでいってもただの模倣であり、結局は術者の知識と技

術が重要となるのだ。

そこにくると、術を覚えさえすれば十全に使いこなすことが出来る才能、これがユレンにとっての鬼札となる。

そんなユレンに三代目が螺旋丸を教えてくれたのは必然であろう。自分を越えるやもしれない才を持った子が孫だったのだから。

しかし、ユレンの才が発揮されるのはあくまで習得後である。

当然、螺旋丸などという習得難易度の高い術は片手間で覚えられる物ではなかった。

それでもユレンには忍術の習得には最高の環境があった。

一つは火影の監督下で修行を行えたという事。

週末になると自分の部下に仕事を任せた三代目の指導の下、術の習得に励む。

忍びの神とまで謳われた人物の教えを直に受けた事で修行の進行は非常にはかどる事になる。

そしてもう一つ、才の恩恵によるチャクラコントロールの向上である。

術の最適なチャクラ運用法を知ることのできるユレンは、無意識の内にチャクラの扱い方すらも覚えていた。

針の穴を通す様な繊細なチャクラコントロール。

螺旋丸の術の性質上、それは必須とも言える条件であった。

意識を再び掌に集中する。

不安定なチャクラのバランスを機械の様に精密に保つ。

すると、不格好だったチャクラの形状が変化を始めた。

より球形に近く、術の本来の形へ。

チャクラを放出しすぎた影響で少し頭が朦朧とし始めるが、それすらも意識の外へ。

最後の一滴まで絞り出すようにチャクラを掌へと集中する。そして、術は完成する。

不規則に揺れていたチャクラは完全な球状になり、高密度のそれからは軽い突風が吹き荒れる。

成功を喜ぶ間もなく、ユレンの脳に大量の情報が流れ込んだ。

術の極意とも言つべき知識、開発者ですら気付けなかった未知の領域が。

あまりの量にユレンの脳が悲鳴を上げ、術者の注意が散漫になったことで、術は糸が解れる様に霧散した。

もはや立つこともままならず、ユレンは服が汚れることも構わずその場に倒れ込んだ。

意識が途絶える。

薄れゆく意識の中でユレンが最後に視認したのは、ひどく狼狽した見慣れた老人の姿だった。

ジジコン少女は生け花をするようです(後書き)

ここから地味にチート補正がかかり始めます。

ジジコン少女は異世界のジャイオンをヌッコロスようです（前書き）

ハイ、できるだけツッコまずにお読みください。

ジジコン少女は異世界のジャイオンをヌッコロスようです

夕焼け。

くろくちいろ
淫色の鳥が我が物顔で空を闊歩するこの時間。

うずまきナルトはそんな時間が嫌いだった。

既にアカデミーの授業は終わり、子供達は続々と校舎から出てくる。そして、そんな彼らを迎えにくる親たちも。

彼らはその姿を見つけると駆け寄って、今日の学校はどうだった、新しい術を覚えた、などと楽しそうに報告している。

親たちもそんな我が子を微笑ましげに見つめ、頭を撫でる。

そして、今日の夕飯の話をする子供が飛び跳ねて喜ぶいつもの光景。

直視すると眩しい様な気がして、ナルトは額のゴーグル越しにそれを見つめた。

ナルトには親がいない、物心付いた時には既にそうだった。

狭いアパートの一室も子供の自分一人には広すぎる。

朝起こしてくれる人も、自分の帰りを迎えてくれる人もいない。

だからだろうか、親がいないという事をそれほど悲しいとは思えなかった。

ただ、少しだけ羨ましいと、ナルトは校庭のブランコに揺られて思う。

そこで、後頭部に走った鈍い痛みによって、ナルトはブランコから滑り落ちた。

顔面から地面に落下したため、額が少し切れている。

顔の近くには投げやすそうな小石が落ちている。どうやらこれが飛んできたようだ、と推測したナルトは未だ痛む頭を擦りながら後ろを振り向いた。

ニヤニヤと嫌な笑みを顔に張り付けた3人の少年が腕組みをしながらこちらを見ている。

これで何回目だろうか、親のいない事をバカにするこの少年達に、ナルトは幾度となく絡まれている。

「またお前らかよ…なんなんだってばよっ!!」

「うーん、ナルト君が寂しそうだったからさ、俺達が遊んであげようと思って、なあ?」

「そうそう、感謝してくれよ、友達のいないお前と遊んでやってるんだからさあ」

ナルトは里の人間から忌み嫌われていた。

ナルトもその事は敏感に感じとっていたが、何故嫌われているのかまでは分からなかった。

当人は知る由もないが、原因はナルト本人ではなく、中にいる者が影響している。

”九尾”。突如として木の葉の里に現れた尾獣である。

里に壊滅的被害を与えたこの事件は、自らの命を対価に封印術を施した四代目火影によって幕を下ろした。

しかし、この事件で人々の心に巣くった暗い感情が消えたかと言え

ばそうではない。

恋人や我が子、愛する人を失った人々の怒りが向かったのは当然の如く、その身に”九尾”を宿したナルトに向かった。

子供とは素直な生き物である。

そういった大人達の行動に影響され、いつしかナルトには誰も寄り付かなくなった。

過激な者はいつそ殺すべきだと主張し、そういった者の子供はそれを色濃く受け継いでいる。

この光景も里の背景からすれば不思議はないのだろう。

そして、これが悪い事だと思わないければ人はどんなことでも平然と行う。

例えそれが暴力だとしても。

ナルトは何度目か分からない衝撃に身を丸めて耐えていた。

子供達は腹部や頭部、それぞれバラバラに殴り、蹴り続けた。

これを見ても何も言わない周りの大人達に、ナルトはいつそ清々しいといった感想を抱いた。

忍者の卵だけあって、子供と言えども一発が重い。

腹を蹴られた。今度は頬を殴られた。

徐々に薄れゆく意識の中、ナルトは視界に入ったバイオレットに目を奪われる。

水晶の様に澄んだ瞳、ラベンダー色の髪はシルクのと見紛う程に艶がある。

触れれば壊れてしまいそうな手をこちらに差し出してくる。

少し躊躇したが、慎重にナルトはその手を取って立ち上がった。

「お前がナルト？金髪って一人しかいないからお前しかありえない

「ただけだな、一応聞いておいてやった」

「そうだったば、オレがナルトだったばよ」

外見と口調のとのギャップに思わず声を出してしまいそうになるが、努めて平静を保って名乗る。

「そ、なら伝言だ。おじい様が…あー火影様のコトな、とにかくおじい様が呼んでんだよ、なんか夕飯のお誘いらしいな」

知らずの内にナルトの顔がにやける。

これまでも何度か三代目には夕飯を御馳走された事があった。そのときに優しいげな表情で話しかける老人に、おじいちゃんとはこういうものなのかな、と居もしない祖父の姿を幻想したりもした。自分に優しく接してくれる人物が片手で数える程しかないナルトは、笑顔のまま目の前の少女に了承の旨を返した。

「分かったってばよ。6時過ぎくらいに行くから伝えておいて欲しいってば」

「ああ、伝え「おい、なに無視してんだよっ！」…クソが……」

少女との会話ですっかり忘れていたが、自分は今虐められていたのである。

蚊帳の外へと追いやられていた3人は額に青筋を浮かべてこちらを

睨んでくる。
どうやら少女にも怒りが向いているようで、手の関節を鳴らして威嚇している。

「おい、女が邪魔すんなよ！それとも一緒に遊んでやるつかア！」

「この子は関係ねーってばよー！」

この少女が殴られるところを見たくなかった。

美しかったという点もあるが、もっと深いところでナルトはそう思った。

今も恐怖に震えているのかふるふると体を震わせている。

嗜虐心をそられたのか、少年達の顔が愉悦に歪む。

ナルトは無意識の内に少女を庇う位置に立ち塞がった。

また殴られるのだろう、迫りくる鈍痛に耐える様に目を瞑った。

鈍い音が響く、しかし痛みは感じられない。

恐る恐る目を開くと、少年達が仰向けに倒れていた。

皆一様に泡を吹いて、ガタガタと震えている。

「ゴミ虫共が…なーにが遊んでやるだよ。あーム力つく」

手を払いながら呟いた少女を見て、ナルトは憧憬に近い感情を抱いた。

夕日をバックに立つ姿はどこまでも勇ましく、それでいて儂げだった。

「名前…、名前教えてくれればよ」

意図せず口から出た言葉に内心驚きながらも、ナルトは少女の返しを待つ。

「あー、ユレンだよ、猿飛ユレン。そんじゃ伝えたから私は行くぞ、じゃあな」

颯爽と去って行った少女、ユレンの背中が見えなくなった後も、ナルトはしばらくその方向を向いていた。

しばらくすると、ハツと思いつた様に膝を屈伸させてから、懐を探ってゴツイフォルムの目覚まし時計を取り出した。時刻は4時と半分を過ぎている。

約束の時間まではいくらか余裕がある。

自然と足は動きだしていた。行先は木の葉の里郊外にある森の中。自分の秘密の修行場である。

ジジコン少女は異世界のジャイオンをヌッコロスようです（後書き）

みごとに劣化版ジャイオンが…。

誰だよコイツラ…、こんなスレた子供嫌だわ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6403y/>

それでもジジイは見捨てねえっ！！

2011年11月20日19時13分発行